

シリーズ 地域の達人 -野田富士樹氏-

# 丹波の恐竜化石 発掘ボランティアに聞く。

今回の化石の発掘は恐竜研究の歴史の新しい1ページを、私たちボランティアも一緒に開こうとしているのだと伝えたい



Fujiki Noda

## 野田富士樹

南あわじ市在住。

3年前に「南あわじ地学の会」を立ち上げる。造船所の仕事の傍ら、地元の学校での授業や、化石の展示を行っている。



写真上／発掘現場での様子  
(写真中央黄色いヘルメット)  
写真下／野田さん

### 古谷裕研究員からのひとこと

野田さんにはじめてお会いしたのは2001年ですが、もっとも印象に残っていることは、やはり翼竜化石の発見です。発見の経緯はハーモニ-47号に書きましたのでそちらをごらんいただくとして、ここでは裏の事情に少し触れてみたいと思います。緑町（現南あわじ市）では2001年から緑町内の淡路ふれあい公園に残された和泉層群の露頭で、人と自然の博物館の協力を得て化石調査が始まり、野田さんも参加されて何度かにわたって重機による掘削が行われました。そのときの調査では多数のアンモナイトや二枚貝等の化石が得られるなど、一定の成果を上げることができました。また、一般の方を対象とした体験発掘会や講演会も数回行われていました。

それらの事業が一段落した2004年始め頃には、露頭前の残土は公園奥の空き地に移されていました。そして、野田さんはボランティアとして一人で化石のクリーニングを進める一方、残土からの化石探索を続けていました。そしてその年の4月、空き地を駐車スペースとして利用するために、山積みになっていた残土をならず整地作業が行われました。翼竜化石が発見されたのはその直後のことでした。ならされて一面に広がっている石ころの中から、発見したのです。一見すると周りの石とは区別がつかない、だだの黒い石です。野田さんの眼力の鋭さと、その熱意にただただ驚くばかりでした。

発見された化石は割れ口が新鮮だったので露頭から掘り出された後で割れたと考えられ、その続きの部分を残土から探すべく、その後数回にわたって一般の方に参加していただいて、発掘会が行われました。しかし、いまだに発見にはいたっていません。

(古谷 裕：自然・環境評価研究部)

前回は、発掘とクリーニング作業のボランティアをしてくださっている、松原氏にお話を伺いました。今回は、第1次・第2次と続けて発掘ボランティアをしてくださっている、野田氏にお話を伺いました。

### 1. 第2次発掘の生活

自宅と仕事場は南あわじ市にあるので、こちらでは単身赴任のような生活を送っています。毎日の発掘作業が終わると現場近くの宿に帰り、夕食をとります。夕食はだいたい宿の隣の「寿美礼」で食べています。その日の発掘作業を日記につけ、入浴し午後11時ごろには床につきます。朝はだいたい7時に起床し、食事をもって現場に出かけます。買い物以外は、ほとんど出歩きません。テレビもラジオもなく、周囲に何もなしの宿舎で静かに本を読んだりして、一人暮らしを楽しんでいます。

月曜日から金曜日は化石発掘現場での作業に従事し、週末に家業である造船所の仕事をしています。普段から仕事が週末に集中していたことと、何より家族の理解と協力でのこのような生活ができていると思います。

### 2. 淡路島での翼竜化石の発見

2004年4月末に私は、淡路島でアズガルコ科の翼竜の化石を発見しました。発見地はそれまでもアンモナイトや二枚貝の化石は出ていたところでしたが、博物館の研究員などの専門家が「もう化石は出ないだろう」ということで整地されていました。整地された後の土地に私は足を運び、なんとなく気になって拾った石を割りました。断面から円柱状のものが見えました。骨とは思えませんが、町を通じて博物館に鑑定を依頼したところ、翼竜の首の部分の骨の化石であると確認されました。関西初の発見ということでした。

た。私が発見した化石が翼竜のものであるとわかったとき、嬉しいというより安堵しました。それまで、淡路島で頑張ってきたことの答えが得られたような気がしました。発見後、地元の教育委員会の力を借りて「南あわじ地学の会」をつくり、化石を通じ学校で授業や展示などの様々な活動をするようになりました。

### 3. 丹波の恐竜化石発掘への参加

丹波の恐竜化石発見の知らせを南あわじで聞き、これは私にとって一生に2度とない機会だと思いました。そこで、家族には「わがままを言うが行かせてほしい」と無理を言って第1次発掘作業に参加することにしました。ですが、第2次発掘に参加することは、かなり迷いました。南あわじから発掘現場へ通うことは出来ませんし、仕事も休まなければいけませんから。しかし、発掘作業が途中であり、なりゆきを自分の目で確かめたいと思い参加することにしました。

時々、仕事を休んでまで丹波へ来る意味を考えます。しかし、この恐竜の化石の発掘に関してのニュースを見聞きする側になりたくはありません。今は、したいことをすべき時で、仕事は後でも出来る気がするのです。やはり第2次発掘に参加して良かったと思うのです。

### 4. 読者へのメッセージ

今回の化石の発掘は恐竜研究の歴史の新しい1ページを、私たちボランティアも一緒に開こうとしているのだと伝えたいです。子どもたちには塾や勉強より、もっと身の回りの自然とつきあってほしいと思います。自然現象を見ていると感動するのです。そういった感動を子どもたちに伝えたいと常に考えています。



写真左／野田さんが宿泊されているさくら会館  
写真右／発掘期間中つけている日記



# ひとはく恐竜ラボ 山南ルームがオープン!



写真左/丹波竜化石工房屋内

丹波竜化石工房は、丹波市主催、人と自然の博物館共催のもと、丹波市山南町谷川・山南住民センター内に昨年の12月に開館しました。同館には、第1次・2次発掘調査で搬出された尾椎や血道弓を含む岩塊などが運び込まれ、現在、人博の研究員1名と松原薫さんと横内悦実さん、そして多くのボランティアの方の協力のもと、これらのクリーニング作業を行っています。化石のクリーニングとは一般にイメージされがちな所謂「洗濯」ではなく、岩塊から化石をタガネやコンクリート針などを使って慎重に取り出し、そして、化石を覆っている被膜を顕微鏡下でエアーマーキングペン（ペン型の小型削岩機）を使って取り除く作業のことを言います。そのような作業を経て、ようやく本来の骨の形状が明らかになり、研究者がこれらを細かく調査することによって、それらの化石がいったいどういった生物であったのかが明らかになっていきます。同館は、ガラスで展示室と作業室が別けられており、入館者がこれらの作業をガラス越しに間近で観察することができるようになっています。また展示スペースには、恐竜化石発見から、発掘に至る経緯、発掘での作業風景やこれまでの成果がパネルにて紹介されています。それに加え、傷や色など本物と寸分変わらない化石（血道弓や尾椎）のレプリカや、化石を包含していた泥岩、その泥岩中にみられる生痕化石なども展示されています。あなたも一度太古の生物を身近に感じてみませんか？

詳しくは、丹波市恐竜を活かしたまちづくり課まで。  
(池田忠広：自然・環境評価研究部)

## ひとはく恐竜ラボ 2008/4/20(日) OPEN!

人と自然の博物館に新しい施設が4月20日(日)オープンします。名前は「ひとはく恐竜ラボ」。  
2006年丹波市で発見された恐竜化石は、竜脚類のなかでもティタノサウルス形類に属する恐竜で、日本で初めて全身骨格発掘の期待が膨らんでいます。  
2006年度、2007年度の2度にわたる発掘調査で、尾椎、血道弓などの尾の部分のほか、肋骨、坐骨などの体の部分、そして脳函、歯、環椎などの頭と首の部分が一部発見されています。とくに尾椎はつながった状態で、肋骨は並んだ状態で発見されました。  
この「ひとはく恐竜ラボ」では、恐竜化石のクリーニング作業を目の前で見ることができます。ぜひ、発掘調査最前線の様子をご覧ください。  
(平松紳一：生涯学習課)



写真上/ひとはく恐竜ラボ

### 岩槻邦男先生の文化功労者顕彰を祝う会

祝賀会は帝国ホテル富士の間の大きな富士山の緞帳をバックに、堂本千葉県知事、河合雅雄名誉館長ほか来賓の祝辞ではじまった。  
堂本知事は、岩槻先生を初めてテレビで見てから今に至るまで、生物多様性について教えを請うてきたことなどを話された。河合先生は日本の博物館の将来にとっても岩槻先生は欠くべからざる人だと話された。  
会には先生の教え子や同僚をはじめとする生物学者のみならず、植物園や出版社の関係者、環境行政に携わる人々、さらにはアマチュアの植物研究者ら、200名以上の方々が全国からお祝いに駆けつけた。歓談中も挨拶や写真撮影のために岩槻先生ご夫妻のもとを訪れる方々が引きもきらず、飲み物で喉を潤す暇もないような状態だったが、ご夫妻は終始にこやかに相手をされていた。  
最後に岩槻先生は、参列者へのお礼の言葉とともに、生物多様性の分野の発展に寄与したという文化功労者顕彰理由をとりあげてこの分野に光が当たったことへの素直な喜びを述べられ、生物多様性を研究する生物学者らから盛んな拍手が送られた。

(高橋 晃：自然・環境評価研究部)



上/挨拶をされる岩槻邦男館長  
中央/出席者の皆さんと  
右/河合雅雄名誉館長と

## 企画展 2008. 2. 23(土)~8. 20(水) (会期延長しました) 「クリプトガミック・ボタニー」



鳴門ワカメの実物標本

いよいよ始まった企画展。聞き慣れないタイトルですが、つまりは花の咲かない植物のすべてをあますことなく、そしてわかりやすく紹介するものです。中でもこれは見逃せないという8つの話題を取り上げてみると、  
○大判写真で見る隠花植物の美：プロが撮影した多数の美しい生態写真を一挙公開。  
○鳴門ワカメと巨大なスギゴケ：その大きさをぜひ実物標本で確かめてみてください。  
○六甲山の貴重な隠花植物質：身近な六甲山に生きる隠花植物の知られざる姿を紹介します。  
○キノコで染め物：そのやさしい色合いは、きっと自分でもためしたくなることでしょう。  
○キノコの封入標本：生きていたときの色と形がそのまま保存できるすぐれものです。  
○冬虫夏草に迫る：名前ほど実物は知られていない冬虫夏草。精巧な拡大模型は迫力満点です。  
○人との関わり：食品、薬品、園芸など、人の生活に深く関わる隠花植物を紹介します。  
○「動く！生きる！隠花植物の世界」：時に激しく、時にやさしく、生きのびるため動く彼らの姿を映像でじっくりご覧ください。

(秋山弘之：自然・環境評価研究部)

水面を漂うコケ植物  
イチョウウキゴケ



モグラの便所に生える  
ナガエノスギタケ



冬虫夏草  
マルミノアリタケ

